

三千の同志一致團結

大東亞建設に寄與

社長 古野伊之助

全世界の驚異

シンガポール陥落を機會に第一次戰捷祝賀の舉國一致の慶びを讀めたのは、まだ僅か一月足らず前のことに過ぎなかつた。一ヶ月を出でない今日、もう既に關印全面にわたる戰定成つて、ここに再び第二次戰捷祝賀の日を迎へることは何たる喜ばしいことであるか、有難いことであるか、感激を表現すべき言葉を見出さないのであります。畏くも宣戰の大詔を拜しました僅々三月前のわが帝國の狀態を靜かに振り返つて、さうして今日の皇國日本の姿と思ひ比べてみたらば、全く到底人間の想像力でおよぶことの出来ない大きな變化であつた。

さらにこゝにをられる諸君も一生涯のうちに、かうした大きな世界的變革期に遭遇しようとは豫想せられなかつたことだらうと思ひます。われわれ自身がかさうであるばかりでなく、全世界のそれは驚異である。世界の歴史を、人類の動向を根柢から改めた、眞に人類未曾有の大變革にわれわれは逢着した。その喜びを感じると同時にその意義を本當に検討して、われわれのなすべきことが何であるか

を考へなければならぬと思ひます。三月前にやれ資金凍結だ。經濟壓迫だ。ABCD包圍陣だといつて立騒いでゐた大和民族は、もう昨日の對日包圍陣の據點は東亞安定の堅壁と化し、昨日の帝國壓迫の牙城は英米に對する進攻の據點と變つたのであります。

かくて太平洋全面にわたつて散在する數百の島々は全部東亞の安定、世界の平和確保の據點と化すこととなりまして、その一つ一つが不沈の大戰艦と化し、大航空母艦と變つた搖ぎなき大東亞新秩序建設の根柢を確立することと思ひます。さうして大東亞に住する十億の諸國民族を糾合して、東亞安定の地歩を固めると同時に、世界の平和を確立すべき最大原動力として、わが大和民族は、まさに發足せんとしつゝあるのであります。

殉國精神と戦歿勇士の母

かやうな夢にも考へ得られなかつたやうな大戰果、大變革、これをもたらした、その一大原動力は何であらうか。

いろいろ技術の進歩もあるであります。裝備の優秀さもあるで

號 五 十 五 第
月 四 年 七 十 和 昭
行 發 日 十 一 月 每
行 發 日 十 一 月 每
錢 五 金 部 一 價 定 誌 本
錢 十 六 金 (共 稅) 年 一
一 才 田 杉 監 行 發
一 才 田 杉 監 行 發
國 公 谷 比 日 區 町 趙 市 京 東
社 信 通 盟 同 所 行 發

せう。また過去十年、二十年にわたつて、いろいろな準備が整へられたこともありませう。軍當局が語るやうに支那事變は日本の消耗戰にあらずして日本の準備時代であつたといふこともありませう。しかしその根柢に漲るものは何といつても大和民族に一貫せる殉國の大精神だと思ひます。

私は最近私の長男と同期生であつた海軍の少尉が、開戦早々マレーの沖の海戦で戦死されたので、その遺族を訪ねて、さうして慰問を申述べたのであります。そのときに、その亡くなられた海軍士官の遺品を列べて、その前でお母さんがいはれるのに

『私の子供は砲門の前に鉛筆を握つたまま敵陣にあつて、ばつたり仆れていつたきりださうであります。本當に子供は喜んで死んでいつてくれたこと、心から信じてをります。遺品を前にお聴しのことながら涙を流すのは親だけだと思ひます。兵學校在學中二、三度親の手許へ歸りましたが、次第に心構へがしつかりと變つて行くのと、國のために捧げた命だといふ氣持ちがしつかり出来上つて、いつの間にかこんなに變つて行くんだらうと思つて、つくづく教育訓練の力の偉大さを感じました。子供は本當に喜び勇んで仆れていつてくれたこと、思ひます。後に残つて子供のことなんか想起して泣いてゐるのは母親ばかりだと本當に心から考へます』

といつて喜ぶやうな、悲しむやうな、悲喜交々たる心情を物語られたのであります。

これはただ小さい一つの例に過ぎないのであります。われわれが日々われわれの電話、電信を通じて報道してゐる通り、前線に戦つてゐる將兵一人々々の氣持ちがこれである。

先般特別攻撃隊の九勇士のお話なんか、こまごまと新聞紙上に發表されましたが、無名の數百、數千の皇軍將兵は皆同じ、この殉國の大精神に燃え立つて、その驚くべき有史以來前例のない大戰果を収め、さうしてわが大和民族將來のため確固不動の立場を確立してくれたことと考へる。この赫々たる皇軍將兵の偉勳を考へ、また裏面に隠れてゐる數千、數萬の尊い犠牲を考へるときに、銃後に生きるわれわれは、ただ日常の無事な生活に馴れて、ちつぽけな自分の地位だとか、損得だとか、そんなこ

と考へてをられぬといふこと、つくづく思ふのであります。

本當に前線將兵のこの大精神をわれわれ一人一人の心構へとしてわれわれは何をなさねばならないかといふことを眞剣に考へなくてはならないと思ふのであります。しかしこの赫々たる戰果、尊き犠牲に應ふる唯一の途は職域奉公の一言につきると思ひます。

一億の國民はそれぞれその職に應じ、分に従つて最善をつくすこと、大東亞建設に寄與する所以であり、この大業を遂行するところの國民的使命達成に協力する所以であると思ひます。

同盟本來の使命を思へ

しかしわれわれ同盟三千の同志はこの大きな戰果、この大きな世界的變局、變革、その意義を思ひ、勇敢に起ち上つて、わが日本帝國の對内、對外思想戰の中樞機關として、重大なる使命を果さなければならぬのであります。

戰捷第二次祝賀式舉行

ランゲーン攻略、關東東インド戰定と相次ぐ皇軍の赫々たる武勳を讀へるため本社では三月十二日戰捷第二次祝賀日の午前九時總員編輯室に參集し、大體第一次祝賀式と同様の次第で敬虔嚴肅に慶祝の式を執り行つた。この日古野社長は社を代表して左のごとき皇軍への感謝祝電を發した。

皇軍への感謝電報

△飯田綱四方面陸軍最高指揮官宛 酷熱瘴癘の地に御勇戰遂に敵據點ランゲーンを攻略せられたるの快報に接し一億國民の感激茲に極まされり。謹んで祝意を表すると共に

ければならぬのであります。われわれ同志三千の中には、或は内に止つて國內の體制確立のために必死の努力をしなければならぬ諸君もありません。また次々に南方に、或は支那大陸に乘出して、東亞諸民族の一致團結體制を確立すべく、積極的な、思想戰に乘出さねばならぬ諸君もあらうと思ひます。

われわれ三千の同志は本當にこの世界的變局に直面して、われわれの擔當する任務、その意義を十分に悟り、さうして一意われわれの職分奉公を果さなくてはならぬといふ感を、この慶びの最中、國を擧げての感激の渦巻きの中に、痛感する次第であります。

どうか諸君は、わが同盟本來の使命を絶えず思ひ、しかしこれだけの分野において、その最善を盡すべき覺悟と決意を新にして頂きたいと存じます。(戰捷第二次祝賀式における挨拶)

第一次戰捷祝賀式に際し古野社長より發した感謝電報に對して二月二十四日次の謝電を社長宛寄せられた。

△寺内最高指揮官謝電 今般一シンガポール一陥落に方り寄せられたる祝意に對し深甚なる謝意を表す 昭和十七年二月廿四日 南方軍最高指揮官 伯爵 寺内 壽一

△今村最高指揮官謝電 早速御丁寧なる祝電を賜り感謝に堪へず比較的短期に進展致したるは、一に御稜威の賜にして感謝しあるところなり。統後國民、特に新聞通信社各位の熱心なる御後援に對しては將兵一同深く肝銘しあり、茲に厚く御禮申上。 昭和十七年三月二十二日 東印度方面最高指揮官 今村 中 將

思想戦の中樞機關

第四回大詔奉戴日に於ける 古野社長の訓示

今日ここに諸君と相會して第四回の大詔奉戴日を迎へるに當つて日比谷の原頭においてはハワイ眞珠灣の特別攻撃隊の軍神九勇士に對する海軍合同葬の行はれるのを見て一入感慨深いものがある。

靜かに過去四ヶ月の間にわたつて、われら日本民族が世界の歴史に刻みつけた、その足跡を振り返つて考へてみると、如何にもその規模の雄大であつて、そのもたらされた變化のいよいよ遠大であることに、ただ驚嘆するほかないのである。

十月二十八日

宣戰の大詔を拜するやわが皇軍將兵は南方の大戦果を収めた。この陸に、海に、空に、世界の戦史に類のない戦果を挙げ得た、そのすべての戦を一貫したものは開戦の劈頭に現された眞珠灣特別攻撃隊の皇軍若人の殉國の大精神であつたと思ふのである。

開戦以來終始一貫、陸軍も、海軍も、空軍も、たゞ皇國のために己の身命を投げ捨て、戦ひ、闘ひ抜いた結果、この四ヶ月の間に全世界の様相は一變してしまつたのである。

かくていま皇國日本は必勝不敗の態勢を確立し得たのである。この僅か四ヶ月の間に、わが日本民族がなし遂げた姿を、じつと眺めてみると、われわれは、これが天の意であり、地の利であり、人の和をなし得たといふことに思ひ當らずにはをられないのである。

これが天意であるといふことは、われわれが持つ三千年の歴史に徴して、古くは天孫降臨、神武御東征の時代から、今日の大東亞戦争にいたるまで三千年の歴史を回顧してみると、この世界の一角に位置する小さな島國が、所謂國家の危機に民族の總力を結集して、必ずその危機を打破し、障壁を破壊して一歩々々國運の進展、發達を遂げて來たのである。

大東亞戦争後一年だけを振り返つてみても、漸く四ヶ月前には何とかして平和裡に日米の關係を打開しようとして、どれ程朝野ともに苦心したことであらう。しかも米國の世界制覇に對する野望は遂に帝國の立場と相容れず、一度干戈をとなつて起つや、今日の有様である。

我三 本民族に對して天の意思を示唆し、明示してゐるといふことを深く考へざるを得ないのである。しかしして今日、僅々四ヶ月の間になし終つた太平洋全領域にわたる戰定、その姿を靜かに眺めるとき、世界の歴史、世界の地圖を繰り擴げて、この全世界の立場からみた太平洋の地位を振り返つてみると、何處をみて歩いても一つの地域に千數百の島々が密集して、さうして、その一つ一つの島が、まさに日本民族の努力によつて一つ一つが永久に沈まざる航空母艦と化し、戦艦となるのである。これを思ふときに期せずして世界最強、最大の海洋國家が現出

してゐるといふことに思ひ當らざるを得ない。世界地圖をよく御覽下さい。この感をいよいよ深くせざるを得ない。しかもこの太平洋全面を船舶補給の一途に努力を費せば、全部が鋪裝道路である。しかしして今世界の各國は、とかく陸上の資源にのみ注意を奪はれてゐるが、この廣大なる海洋には無盡蔵の資源を蔵するものであるといふことを思ふときに、帝國は誠に必勝不敗の態勢を地理的に確立してゐるといふことに思ひ當るのである。

大東亞戦争開始前の東亞の情勢をみればその到るところが、或は米國、英國、オランダ、その他の歐米各國の諸勢力によつて寸斷されてゐた状態である。過去の歐米勢力侵略の結果によつて國人もみな寸斷されてゐたのを、一舉にして木葉微塵に踏みじつて、この一連の地域を日本民族の結集した總力によつて眞實の東亞人の東亞を築き上げやうとするのである。

我三 本民族に對して天の意思を示唆し、明示してゐるといふことを深く考へざるを得ないのである。しかしして今日、僅々四ヶ月の間になし終つた太平洋全領域にわたる戰定、その姿を靜かに眺めるとき、世界の歴史、世界の地圖を繰り擴げて、この全世界の立場からみた太平洋の地位を振り返つてみると、何處をみて歩いても一つの地域に千數百の島々が密集して、さうして、その一つ一つの島が、まさに日本民族の努力によつて一つ一つが永久に沈まざる航空母艦と化し、戦艦となるのである。これを思ふときに期せずして世界最強、最大の海洋國家が現出

してゐるといふことに思ひ當らざるを得ない。世界地圖をよく御覽下さい。この感をいよいよ深くせざるを得ない。しかもこの太平洋全面を船舶補給の一途に努力を費せば、全部が鋪裝道路である。しかしして今世界の各國は、とかく陸上の資源にのみ注意を奪はれてゐるが、この廣大なる海洋には無盡蔵の資源を蔵するものであるといふことを思ふときに、帝國は誠に必勝不敗の態勢を地理的に確立してゐるといふことに思ひ當るのである。

してゐるといふことに思ひ當らざるを得ない。世界地圖をよく御覽下さい。この感をいよいよ深くせざるを得ない。しかもこの太平洋全面を船舶補給の一途に努力を費せば、全部が鋪裝道路である。しかしして今世界の各國は、とかく陸上の資源にのみ注意を奪はれてゐるが、この廣大なる海洋には無盡蔵の資源を蔵するものであるといふことを思ふときに、帝國は誠に必勝不敗の態勢を地理的に確立してゐるといふことに思ひ當るのである。

「社歌」追加再募集

昨年十一月七日のわが社創立記念日に發表した社歌募集については同年末の締切日までは全總支社局より八十二篇の多數作品が集つたが、募集期間中たまたま大東亞戦争勃發し職務多忙のため應募出来なかつた向もあつたのと當時に較べ現時局下われわれの感激と決意もまた自ら新たなるものがあらうと思はれるのでさらに廣く一般から力強い優秀篇を得るため追加再募集することになつた。一人で幾篇應募するも差支へなく、前回應募の向も奮つて再應募されたい。募集要項は左の通りである。

- 一、歌詞 同盟精神を謳ひわが社の擔ふ重き使命と大なる任務を強調せるもの
 - 一、四節以内(一節は四節乃至六節のこと)
 - 一、作品 同盟職員自作のものに限る
 - 一、原稿には匿名を用ひ封筒には所屬支社局および氏名を明記のこと
 - 一、締切 本年六月末限り
 - 一、宛名 本社文書部社歌懸賞係宛
 - 一、選者 本社詮衡委員
 - 一、賞金 一等當選一篇 金五百圓
 - 一、佳作には薄謝を呈す
 - 一、發表 九月號社報において行ふ豫定
- 近々タイム・レコーダーを設けてわれわれみんなが仕事に規律をもたせて行くために出社、退社の時刻を記録しようと思ひます。
- いづれレコーダーが出来たら職員會を通じてその趣旨なり、方法を徹底するつもりであるが、これに充分御協力願ひたいと思ふことと、モウ一つ……

いま同盟の使命は報道報國にあるといふことを改めて申しました。そのうちで、もつともこの時局に直面して重大な役割を背負つてゐるのは海外部における世界放送である。

同盟の世界放送を通じてのみ世界の各國に對して、この大東亞戦争の進行の情勢と、日本の將來とつて行かうとする方針、眞意等を明かにして行くのであつて、わが日本の對世界思想戦の一番大きな役割を擔當してゐるのであるから、これは衝に當る海外部において、單に海外放送を取扱つてゐる人ばかりでなく全社を擧げてこの仕事に協力して戴かなければならぬ。

今日のはたゞ海外部の世界放送の必要上、他の部局に對して色々といふことが出た場合には、充分これに對して協力して戴きたい、それが即ちわが同盟建設の同志一人々々が今日の大東亞の事業に當與する所以であるといふことを、よく考へられ、この點についても充分の協力を願ひたい。これだけ申上つて私の話を終ります。(四月八日)

去る三月より静岡市に左のごとく支局を開設した。

静岡市紺屋町四十六番地 静岡新聞社内

同盟通信社静岡支局 主任 一ノ瀬 博 電話四、二一六番

富山支局 移轉 富山支局は左記に移轉した。富山市安住町三十一番地 北日本新聞社内

職員會・青年團彙報

職員會幹部異動

- 幹事長 森 元治郎 (編輯)
- 幹事 大塚 嘉次 (同)
- 同 齋藤 亥彦 (調査)
- 同 船木 重光 (總務)
- 同 田中三之助 (同)
- 同 小寺 巖 (經濟)
- 同 粕谷 源藏 (總務)
- 同 進藤陽吉郎 (同)
- 同 高野太一郎 (通信)
- 同 永松泰一郎 (經濟)
- 同 上野伊三郎 (大阪)
- 同 兒玉 正彦 (同)
- 同 吉富 正甫 (北支)

本社班長會議

(四月八日)

先づ古野會長より去る四月三日の第一回體育錬成大會が成功裡に行はれたことについて感謝の挨拶あり、ついで大平錬成大會委員長よりも同様感謝の言葉あり、直ち

青少年報道戰士教養の重要性

同盟の仕事に携つてゐる青少年は一人の落伍者もなく立派な人間に大成したい。これには青少年指導のため組織を持つ必要があるといふ社長の信念より同盟青年團の結成をみるにいたつたが、青少年に對する教育と錬成は青年團の重大使命である。否同盟全體の責務でなければならぬ。

青少年の指導には家庭教育、學校教育とともに社にあつて働きたがら陶冶されるといふ點を看過してはならない。社に勤務する青少年は學校の教師に教はる時間より

も、家庭にあつて父母兄弟に接する時間よりも、社において社員に接する時間の方が長いのである。この點よりみて社員の有言、無言の感化力は決して輕視出来ない。感受性の強い青少年に對し指導を誤れば一生取り返しのつかないことになる。社員一人々々が道學者のごとく勤勉を説き、善行を勧めたものとはいへぬ。しかし青少年の純な心をむしばむやうな悪感化をおよぼすことなきやう社員各自の戒心を養ふる問題といはねば

ならぬ。仕事の上にも、人間錬成の上にも社員各自が直接青少年教育に當る教師として指導し、相談相手となるやうに努める必要がある。

全社一千の青少年報道戰士は、わが社が彼等青少年をその家庭から、國家から預つてゐるのである。青年團は自らの共同精神によつて團員の教育、錬成に邁進するが、他方社員各自が長上として青年團に支援を與へられるとともに、さらに職場において身近に働いてゐる青年團員に對し、努めて理解をもち、長き感化を與へられたい。社員数の少い地方支局のごときでは全く家族的に融合し、支局長以

△用具—ラケット、ボール、ネット何れも社内に備付けあり。
(ホ) 屋外残置燈増設、照明改善 (ハ) 救急箱設置使用 (ト) 勞務手帳所有者の省線定期券共同購入の實施

等につき、外信班、寫眞班、電務班その他より要望あり、各適切な處理方法を決定した。

庭球部活動開始

スポーツの好シーズンを迎へて庭球部はいよいよ活潑な活動を始めた。従來からの芝公園内正則中學コート(日曜日に限る)のほか新たに日比谷公園コートを利用することとし、去る十三日その第一回を日比谷公園コートで盛大に開いた。

△正則中學コート
(市電御成門下車)

一、日曜日に限り、終日くつろいでプレーが出来た。

一、アスファルトコートであるから硬球、軟球ともに使用可能

△日比谷公園コート

一、當分の間日曜、土曜を除き毎日午後五時から六時までの限定なるも、午前中使用も考慮中

△用具—ラケット、ボール、ネット何れも社内に備付けあり。
(係、外經小寺、人事日下部)

釣友會設置

釣の道樂は舊時代のこと、現代では立派なスポーツの一に加へられてゐる。元來本社には釣の愛好者が相當多きがまだ相互の連絡機關がなかつたが、職員會がこれを厚生施設の一として取上げ、釣友會を設置することになつた。

今後この會を通じて季節々々の釣況を會員相互が報告發表すると、先輩會員より釣場の案内、釣技の指導を受け研究するとか、優秀なる釣具の共同購入をするとか、時に天狗の放談會等も開催すると、かして連絡親睦をはかり、厚生運動として資したい。参加希望の方は編輯庶務課島まで申込られたし。

弓道部再開

大東亞戰爭勃發のため準備半ばで中絶してゐた弓道部も再開の運びとなつた。参加希望者は編輯局タイプ主任木田まで申込まれたし

集團的ハイキング

下社員が一人、二人の青少年を親切に教養してゐる姿をみるが、本社各部署のごとき老大な職場においては可なり冷淡な空氣を感じないでもない。この點より本社青年團のごときは責務の一層大なるを覺ゆるのであるが、青年團の活躍は社員の支援に俟つところが多いのである。

皇軍の赫々たる戦果、華々しき戦捷の蔭には青少年の働きたる驚嘆すべき功績が藏されてゐる。青少年は決して「大人の未成品」ではないといふことを理解し、かしてさらに指導、教養に社員各位の助力を庶幾する次第である。

(本社青年團幹事)

あやめ草足に結ばん草鞋の緒山吹や笠にさすべき枝のなり

——芭蕉——

ハイキングを古典的な詩情と結びつけることは或は妥當でないかもしれない。しかし健康な鍛錬歩行と自然のリズムを偕調せしむるといふことではこの句は想起させるべきものである。健康な肉體と精神を感じながらあやめ草を足に結び、山吹を笠にさす!

これが「健かさ」である。眞の健康はアスファルト路を歩くことからは生れて來ないのである。シーズンになつたので、これからハイキングを組織的にやりたいわれわれは、軽いコースからはじめ、難コースに進み、また健脚向一般向も考へ、更に將來は女子班青少年班、家族班等もつくつてハイキングを眞に社員全體のものにしたいと考へてゐる。ハイキングを愛好されるかたの積極的な御協力を望む。(係、調査部齋藤)

班長會議の討議

三月二日開會、次の提出案につき討議した。

一、衛生、福利施設設の件

社員並に家族の疾病に對する負擔軽減並に救済方法、結核豫防策の積極化、囑託醫の設置

(右提出案に對しては早急に考慮することとなる)

二、厚生部の積極的活動促進の件

(イ) 娛樂設置促進(全般的なるもの)

(ロ) 時局研究会(座談會を開催し有益なる話の交換、講演等をして社員の向上に資し、又圖書部を設置して研究資料を蒐集勉強せしむ。女子社員もこれに合流せしむること)

(ハ) 社員各自の體位向上を目指す

青年團班長會議

本社青年團では三月二十七日、三十一日の兩日に互り班長會議を開催、大平副團長、山本、豊島兩幹事以下全班長、副班長參集大平團長より

「四月三日新聞休刊日には職員會青年團共同主催で全社を挙げて豊島園大グラウンドにおいて體育錬成大會を舉行することになつた。ついではこの大會は團體訓練の一つであるから團員全部が参加すること。なほ團員の家族にも招待券を出すから至急幹事にその人員を届けられたい」

旨述べ錬成大會を通じ社と家庭との融合をはかる意圖を示し、次いで山本、豊島兩幹事より錬成大會當日の諸注意事項を詳細にわたつて述べ、班長は當日それら役員として活動せねばならぬから確りやつて貰ひ度いと希望し、各班とも早急に常會を開いて班長會議に示された諸事項を全班員に徹底するやう要望するところあつた。

し、具體的に現在の厚生部を活用して行くこと
(以上三件に關しては各委員を設け早急に諸案件の解決促進を圖るに決す)

三、自肅自戒の徹底化の件

社内宿舎の各棟毎に室長(又は棟長)を設定して各自の自肅自戒に拍車をかけると共に時局下における社員の體位並に積極的活躍の素因向上をはかる

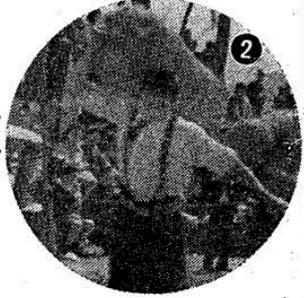
(以上に關しては現在の厚生部を職員會に包含せしめて積極的活動を開始することとなる)

外に社員宿舎増設(妻帯者社員の居住増加による)の件は提出ありたるもこれに對しては相當豫備期間を置き考慮することとなる。

る け 於 に 頭 原 野 藏 武 る 誇 き 咲 花 櫻 の 朶 萬

第一回錬成大會記

典 祭 の 力 の 士 戦 道 報 ふ 誓 を 公 奉 力 體

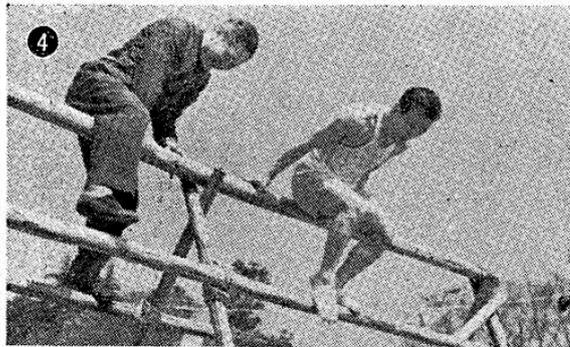


頑健な體力・旺盛な氣力錬成

三十二種目の全競技を敢闘

第一回同盟通信社體力錬成大會 開會、國民儀禮に次いで古野會長は、四月三日の新聞通信休刊日をより報道報國に邁進するわれら同大に擧行された。大會會長古野社長、副會長畠山常務、大平大會委員長、本社、川崎、横濱兩支局の役員並に社員、家族二千が参加、一同多年の念願が茲に叶った喜びに、いづれも元氣旺盛、午前九時

あつてのち、一同ラジオ體操も見事に先づ集團訓練の實を擧げる。九時三十分競技に入り、青年團女子の百米競走に火蓋は切られ、日頃の實力を思ふ儘に發揮して、場内は大會氣分が彌が上にも横溢する。續いて陸上スキ、二人三脚、或は借物競走、ジャングル競走など職員會の統制ある指導と青年團の活躍と相俟つてプログラムは順調に進み、競技毎に觀望者をアツといはせ、場内は拍手と爆笑のつぼにまき込まれて行く。お一回錬成大會の幕を閉じた。



錬成大會 雜感

△體力錬成大會だといつても、運動會か、など、馬鹿にしてゐた氣分もあつたやうだが、大會が近づくと、陽氣がよくなるにつれ、俺も俺もといふ改心組が出て来た。一ゆうべは特別攻撃隊の前夜もかくやと思はれるばかりの興奮で眠れなかつた」と玉君は告白してゐる。△O委員長ともなれば心配は格別、三時に眼が覺めた。運動會のやうなことにこんな苦勞もある。△夏蜜柑のサーヴィスは好評、蜜柑畑に來たやうに兩手に持ち切れないうで、ゴロン／＼と落しながら歩いてゐる若奥さん方もあつた。早く米英を叩き潰して果物なんかファンダンに喰べさせたい。△大會の華二百米リレーは、参加二十四組といふ盛況だったが、本社の中堅の青年記者二十餘名を擁する政治部の不参加は淋しいを通り越して遺憾だつた。△コワイ課長のまへにずらりと社員が並ぶ商會社なら、集りごとをやるにも鶴の一聲できまる。仕事も勤務時間も多岐多様の新聞通信事業をやつてゐるわが社で、宛に角二千名の参加者社員、家族を集めて可なりまとまつた團體行動をやつたといふことは特記に價する。△職員會の班長制の大きな胸試しだつた。隣組の聯合錬成大會といふところ。職員會を育てませう。班長さん御苦勞さん。

△秋にでもやる時には皆んなもつと早く起きて社員總出でやりませう。競技もズボンつりのバンドなしといったスタイルをやめて、短パンツ、運動シャツの颯爽たる姿でキビ／＼やりたい。(スポーツマン記)



技 妙 技 珍

熱戦の大繪卷を展張

を點綴する

うらかな春の日... 絶好の體育日和に恵まれた三日、櫻花咲き誇る豊島園に繰り展げられた初の社内錬成大會は南方の戦野を偲ぶジャングル競走、武装競走、愛嬌タツブリの魚釣競走、パン喰ひ競走など多彩なプログラムに珍技妙技を點綴しつつ、熱戦と敢闘に終始、大成功裡に幕を閉じた。

けふは：新聞休刊日、「一に」などといったは昔のこと、開會式の古野社長の言葉通り「體を鍛るのも國のため」と流石同盟健兒だけあつて、参加率は上々、競技にも棄権はおろか精力のやり場に困つたハリキリスト達の飛び入り續出で係員が整理に困る盛況だ。さてグラウンドでは二人三脚、三組に出場した内信部の小柳高田組

ゴール直前でドウと轉倒、そのまま「轉げ込んで」「怪勝」、塵を拂つてやをら起ち上つた小柳君「轉んでも只是起きぬとはこのことさ」と大得意だったが、お蔭で十二點の貴重なYシャツが肩の所から無惨に引き千切れ、「榮冠涙あり」くさる。くさる。この日の巻撃

(寫眞説明) ①會場入口アーチ、②東京運搬競走、③社長挨拶、④ジャングル競走、⑤風船送り、⑥お手玉競走、⑦綱曳、⑧満悦の畠山常務(右より古野社長、アバステ特派員ギラン君、塚本經濟局長、堀常務、畠山常務、大平委員長)、⑨防火演習競技

ジャングル：競走における牛闘は正に「殊勳甲の上」、先づハールドにつけたジャングルが跳び越せず、ヨイシヨとばかり押し倒し、續いて櫓に組んだ障害を乗り越えたまでではよかつたが、最後の網が抜けられず、網がボタンにかつたり、手からみついたり、牛腸さん中でウロ／＼「マゴク」、みかねた役員達に網を持ち上げて貰つてやつとゴールにたどりついた牛腸さん、嘆じて曰く「マレ！

競技も進んで楽しい畫前「お辨當ののり巻き、みかん、おでん、カルピス等すべて綜合切符制、配布された切符の數量は確保されてゐるので食糧配給は圓滑、圓滿「毎日のお惣菜もかう行けばねえ」と觀覽の奥様方から嘆聲がきこえる。再びグラウンドに眼を向けると今や第六感競走の最眞中、これは記者の感が物をいふ「レースで、トラツクに設けられた三つの關門を松なら松、竹なら竹と所定のパスで通るのだが、この關門は松、この關門は竹で通れると第六感で判断されるといふ仕組である。一方フィールドでは

八貫目の俵：を兩手で差し上げて頑張る耐久競争の熱戦、地方部の石川、編輯務の原兩君、群雄をなぎ倒して二人のネバリ合ひとなつたが、兩豪容易に譲らず、満面朱を注いで頑張ること五分間、原君遂に力盡きて俵を落したが、石川君はほも餘裕を示して俵を差上げたまま、廻れ右二回、最後にエイと俵を投げ

とせば満場拍手の嵐、耐久時間五分と三秒は凄。時局色を盛る女子の防火演習もンベもまじる同盟乙女部隊が先づフィールドに二列に勢揃ひ、組長さんの號令で、鮮かなバケツ・リレーに日頃の手並みを見事に發揮「同盟防衛にこの備へあり」の頼母しさをを見る。可愛い、ヨイ坊ちゃんヨイ嬢ちゃんのお菓子貰ひ競争のあとは大會隨一の豪華版：お歴々の提燈競走社長をはじめ畠山、堀の各常務、それにアバスのギラン、ブル、ステファニアのアウリシヨ氏等もまじる國際レース、皆さん青年の昔に歸つて力走したが、一等の榮冠は老巧畠山常務の頭上に輝き、賞品に幣を貰つて大ニコニコ、惜し

くも三等となつた社長にはアルムの御褒美が授與された。大會は競技の進行と共に愈々高潮、かくて掉尾を飾る各部對抗二百メートル總力戰競走決勝を迎えた。豫選を一着で通過した強豪は横濱支局、社會部、經理部、外經部の四組、何れも局部の名譽をかけて力走したが、遂に一着は遠來の横濱支局の上に輝く。かくて敢闘數時間、この體育繪卷は午後三時頃、なごやかに終了春のひざしにコンがり焼けた一同は幣、茶碗、ノート、手籠等の賞品を手手に三々伍々と引揚げて行つた。

だがこの赫々の「戦果」の蔭に會場の準備や後の整理に黙々と勞苦を積んだ係員や青年團員諸君の活躍を忘れてはならぬ。(應援團長)

關門支社局の新味の催し 戰勝祈願強歩競技

春の新聞休刊日の四月三日、關門支社局では苦心案出の「戰勝祈願強歩競技」といふ新味ある國策型の競技會を行つた。場所は源平の古戰場を舞臺とする下關側唐戸棧橋前の廣場から長府乃木神社拜殿まで海濱電車線路傳ひに二里を走破しようといふのである。先づ通信、經濟、發送、庶務外勤、下關の五部に分ち、各部からそれぞれの選手を出し、二名が一組一團なる故、一名落伍しても優勝圏内から遠ざかることとし、なほ大跨速歩以外馳けてはならぬの原則と、選手は必ず沿道龜山、赤間、忌宮の三神社に詣でて戰捷祈願をなし、護符を戴いてくることを鐵則と定めた。

午前九時半萬歳の聲にスタートを切つた選手に續き、選手以外の支社社員も全部これに倣ひ、乗物一切廢止の申合せで出發する。史蹟と美景に富んだ壇の浦や外浦一帶の海濱より花見客に賑ふ乃木神社境内に入り、ゴールに達した着順は團體では發送、通信、經濟、下關、庶務外勤の順となつた。また個人競技では十六歳の辰巳君の一等、三十二歳の女性和田さんの四等などが氣を吐いた。

かくて正午、一切の競技を終了し、神社境内で賞品授與式を舉行さらに覺苑寺境内の満開の櫻花をめで、同盟萬歳を齊唱して有意義な錬成大會を終つた。

人事 (二三月)

〔註〕編は編輯局、通は通信局、調は調査局、總は總務局の略

- 國內 一ノ瀬 博(通)
靜岡支局主任(一ノ瀬 博)
大林 秀(通)
藤四(大阪)
細谷 藤四(大阪)
樽谷 德太郎(同)
青山 正夫(編)
清津支局長(秋元 久夫(長野)
高松 謙吉(京城)
編輯(清津支局長) 鈴木 一
長野(增澤 基弘(岡谷)
(總務局人事部主任) 田中三之助
總務局人事健康保險主任(粕谷 源藏(總)
總務局文書部厚生主任(室蘭支局長) 佐藤文三郎(通)
編輯(森 武二郎(京城)
調查(戶塚 一郎(通)
臺北(澤入 猛次(同)
編輯(貞吉 武夫(關門)
京城(菊島 武(編)
清津(濱田 八東(高知)
大阪(長尾 義男(京都)
總務(猪伏 清(編)
堀 義明(同)
長興 道夫(同)
山本 滿夫(同)
鈴木 哲夫(同)

- 橋本 儀作(同)
塚本 俊郎(同)
齋藤 桂助(同)
土子 猛(同)
橋野 博一(同)
清河 政雄(同)
松崎 繁(同)
藤本 有典(同)
尾高 昇(同)
箕浦 信太郎(同)
中村 喜八郎(同)
蘆部 茂男(同)
小林 修三(同)
小澤 徹郎(同)
森 武二郎(同)
先名 正二(同)
内藤 勝治(同)
永由 君人(同)
中川 正昭(同)
金井 益雄(通)
梶川 昭(同)
山本 喜左二(同)
橋本 要太郎(同)
前田 清茂(經)
萬喜久太郎(同)
村田 慶治郎(編)
安藤 昌一(同)
安部 知雄(同)
吉野 義幸(同)
黒澤 嘉幸(同)
濱田 收二郎(同)
杉邊 利英(同)
青木 恭之助(同)
坂本 俊治(同)

- 川井 忠和(同)
堀井 功(同)
川邊 美智雄(同)
栗栖 平造(通)
松平 豊吉(同)
猪木 省三(同)
唐木 邦雄(經)
竹崎 節夫(同)
復職 池口光治(大阪、休職)
陳存福(花蓮港) 東海 清(大阪)
澤入 猛次(通) 茨木 定徳(大阪)
植村 隆一(大阪) 小松 正二(豐原)
中川 幸雄(小樽) 齋藤 常太郎(秋田)
小野 隆雄(仙臺) 山口 胖(下關)
柳原 平三郎(總) 松永 二郎(總)
小泉 八郎(同) 田中 泰一(同)
木村 力(同) 小川 彰(同)
中島 義治(同) 穴戸 寛(同)
塚原 嘉平治(同) 佐野 誠一(同)
林 大六(通) 川上 十郎(通)
安井 徹(同) 蛭澤 康夫(調)
河野 幸雄(高松) 仲宗根 朝松(那覇)
翁長 良光(那覇) 穂苅 勇(花蓮港)
以上社員トス
谷岡 勝(名古屋) 古屋 勝代(經)
佐藤 佐知子(神戸) 梶地 綾子(大阪)
中倉 珠子(大阪) 廣澤 綾子(同)
吉井 ふみ子(福岡) 楠 正幸(徳島)
中林 正房(清津) 河西 文子(總)
本田 愛子(總) 奥住 孝子(同)
菊田 初枝(同) 佐藤 和子(青森)
林 秀(室蘭) 今川 一(南支)
佐藤 光夫(南支)
以上準社員トス

- 淺倉 泰(同)
山田 實(南支)
徳永 丈助(北支)
大星 石松(中支)
藤田 正臣(同)
南支(臨時) 鹽谷 作美(北支)
岩井 和夫(同)
豊田 健吉(同)
伊藤 逸夫(同)
脇本 誠一(同)
横山 大治郎(同)
松山 爲之(中支)
小海 長壽郎(同)
北方 時男(同)
バタバヤ 俣野 博夫(調)
昭南島 吉澤 正也(經)
盤谷支局長(水野 政直(編)
マニラ 小川 優(通)
海外 須藤 宣之助(盤谷支局長)
編輯(橋川 馨(國通より)
中村 敏(同)
編輯 橋川 馨(國通より)
原科 幸太郎(靜岡) 馬上 保九(同)
丸山 堯己(編) 赫 駒夫(北支)
後藤 安夫(京城) 林 豊八(關門)
中村 嘉太郎(大阪) 高須 忠彦(調)
濱田 久米夫(調) 木下 榮一(大阪)
岡田 利平(函館) 前田 廣一(花蓮港)
阿部 欣子(總) 奥野 俊夫(京都)
岡松 敏郎(總) 下條 彌一郎(富山)
大野 勝(通) 栗澤 今雄(長野)
金澤 徳治(長野) 小宮 章(編)
中野 勉(通) 大和 格(編)
以上社員試用
近藤 ひろ(總) 張 秋音(高雄)
濱本 清(釜山) 茂原 繁義(平壤)
渡部 由子(同) 野木 智恵子(經)
江口 秀子(經) 松原 助惠(調)
田村 棧道(北支) 根本 ゆき子(神戸)
太田 美智子(神戸) 山崎 イネ(經)
佐々木 洋子(仙臺) 飯塚 静子(大阪)
高尾 まさ子(編) 氏家 てる子(仙臺)

- 高村 千鶴子(總) 沼田 ミツ(横濱)
河口 憲三(熊本) 阿部 カヨ子(經)
以上準社員試用トス
藤枝 高士(調) 清水 長輝(同)
佐々木 公庸(同) 福山 捨喜(熊本)
前田 幾千代(調) 黒石 義男(通)
中里 暢子(大阪) (以上嘱託)

- 松尾 友文(青森) 長女
森 萬二(岡山) 次女
林 耐次(通信) 長男
勝 尼信(名古屋) 同
濱本 光三(釜山) 次男
山田 胖(下關) 長男
矢野 元吉 福岡支
三浦 平吉 北支
△入營・應召
梶谷 二、三郎 北支
菊地 猛 中支
山村 喜左二 通信
宮内 季四郎 同
梶川 昭 編輯
内 神勝 編輯
△見舞
村野 敬雄 編輯
津田 豊人 通信
小宮 頼平 同
杉田 才一 同
神子 鳥格郎 通信
小林 猪四郎 編輯
磯部 政雄 同
竹森 素子 同
龜井 光太郎 同
岡本 春一 同
△弔慰
四條 錦富(經濟) 實父死亡
金本 重俊(同) 祖父同
深谷 保一(編輯) 本人同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△死
三月三十一日
深谷 保一(編)
正誤 前號第四頁上より二段目
右から十三行目高橋 泰二(調査)
とあるは高橋 泰二(調査)の誤りに
つき訂正す。

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一(同)
同 玉木 幹太郎(名古屋)
同 熊本 松次(福岡)
同 野津 康雄(岡山)
同 北里 太郎(臺北)
同 坂田 寛藏(編)
同 靜 成三郎(經)

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

△退社
荻田 定雄 大阪
増田 トヲ 總務
菊地 愛子 編輯
神山 謙介 同
中川 増治 同

公平な審査の結果、入選は
一、春浅き叡山の僧堂
二、支那海の残陽
三、兄弟
三、ネットを背に
宗澤萬壽夫君(經濟)
住谷新市君(業務)
と決定した。今後適時例會を催し
て新聞人として不可欠の寫技を磨
く筈である。

大陸より
村上邦之(中支)
編輯(南支)
同 彌 彌(編)
同 南谷 果(同)
同 前田 波三(同)
同 兼岩 鉦(調)
同 鈴木 四郎(大阪)
同 高田 信一